



麗人哀歌

浩(畫)

(166)

小野村愛

正

散る花咲く花 (6)
たうとうその日が來た。お鈴の
鈴枝は、人目も笑むほどに樂しか
つた母子二人きりの生活を棄て、
伯爵家へ移つた。しかし多喜子は
毎日のやうに訪ねて來てくれる。
これは左程の苦痛ではなかつた。
誰よりも、このお鈴が取られ
たことを恨んだのは龍太郎だつた。
二人は、朝に晩に顔を合せること
である。毎日のやうにしみじみ語
込んで、その果たしたが、お嬢さままで
「やつぱりあなたが、お嬢さまで
いたね。僕には、どうしても、養
父伯爵のお嬢さだとしか思はれませ
ます」

お鈴と結婚したのでは、麗子を
弄んだやうな結果になる。どう
しても気が咎められた。
また、お鈴も、いろ／＼な意味
で龍太郎は伯爵人である。生前まで
もいふほどの愛情は持つてゐる
側は出来ないのがつた。
も――麗子が龍太郎を愛してゐる
ことを知つてゐる。やさしい彼女
じめは主従であつたが、その後多
度に引取られたことによつて友
けて、愛人を横取りするやうな眞
面目は出来ないのがつた。

も――麗子が龍太郎を愛してゐる
ことを知つてゐる。やさしい彼女
には、美しいその令嬢を誇り附
けて、愛人を横取りするやうな眞
面目は出来ないのがつた。
も――お鈴と麗子の關係は、
眞面目は出来ないのがつた。
も――お鈴と麗子の關係は、
眞面目は出来ないのがつた。

「それより、麗子さまが結婚なす
つて下さいな。お兄さまがお嬢として
お嬢う。でも……」

まだ、麗子にも、龍太郎に対する

悲しい諒めである。その麗子の

顔は、寂しげでもあつたが、同時に

悲しき諒めである。その麗子の

顔は、寂しげでもあつ